

# 越前経ヶ岳唐谷川岩屑流と経ヶ岳火山の解体について(昭和60年度卒業論文要旨)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/5305">http://hdl.handle.net/2297/5305</a>

# 越前経ヶ岳唐谷川岩屑流と経ヶ岳火山の解体について

山 田 淳

経ヶ岳は第四紀中期に形成された古い火山であり、現在は山体に放射谷が深く入りこみ火山原面をほとんど失っている。経ヶ岳の南西麓には侵蝕されたかつての火山体構成物が二次的堆積物として広く分布している。

本稿はこの二次的堆積物について地形・地質学的調査を行い、その分布・層相・供給源等を明らかにしようとしたものである。

その結果、南西麓の堆積物の大半は、経ヶ岳火山の大小の類質岩片とその細粒物質からなる無層理・無淘汰の岩屑流堆積物であることがわかり、本稿ではこの堆積物をもたらした岩屑流を唐谷川岩屑流と命名した。

唐谷川岩屑流は現在の唐谷川の上流域が数万年前に何らかの原因で大崩壊をおこし、経ヶ岳火山を形成していた溶岩、火砕岩等が水に飽和せず気固混相流として大野盆地内まで流下したものである。その流走距離は11.5 km、堆積物の総体積は約0.3km<sup>3</sup>である。発生源の唐谷川上流域に南々西に開いた一種の馬蹄形カルデラがあり、内部には滑落ブロックの一部がなす残存地形と考えられる半円形の平坦面がみられる。一方、唐谷川岩屑流堆積物は大きくみて四つの地形面をなす。その一つ塚原野面は、岩屑流が大野盆地に流下、堆積後に九頭竜川により他の面と切り離され台地化したもので、台地上にはかつて岩屑流を特徴付ける流れ山地地形が無数にみられた。また、堆積物中には火山体形成時の成層構造を保持しているいわゆるメガブロックといえる、赤褐色のオビ状構造の部分もみられる。

唐谷川岩屑流の発生時期は今回の調査では数万年前としかいえない。崩壊の原因については噴火の影響はみられず、経ヶ岳火山体の不安定な構造を素因とし、地震、大雨等を誘因に崩壊を起こしたと考える。

以上、唐谷川岩屑流以外にも調査地内には古い崩壊性堆積物及び崩壊地形等が認められ、それぞれ簡単な記載を行った。今後はそれらも含めて定量的に時系変化をとらえ、最終的には経ヶ岳火山の解体過程を明らかにすることが必要である。

